



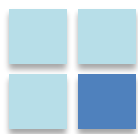
西南学院百年館 松緑館にて

西南学院大学バドミントン部 創部 65 周年
主催：西南シャトル会 後援：西南学院大学

目次



			ページ
1. オモイツナグ 70周年へ	西南シャトル会会長	藤川 幹	P 1
2. 創部65周年記念に寄せて	西南学院大学 バドミントン部部長	伊藤 龍峰	P 2
3. 後輩にも伝えたい	現役男子主将	靱井 慶亮	P 3
4. 歴史に名を刻めるように	現役女子リーダー	岩切 咲歩	P 3
5. ラケットがツナグ			P 4 ~ 7
6. フォトギャラリー			P 8 ~ 13
7. ウエアがツナグ			P 14 ~ 15
8. 卒業アルバム			P 16 ~ 35
9. 現役のページ			P 36 ~ 37
10. 協賛			P 38 ~ 39



オモイツナグ 70周年へ



西南シャトル会会長 藤川 幹（73期）

西南シャトル会会員の皆様には益々ご健勝にて御活躍のこととお喜び申し上げます。

また、日頃より本会の運営、活動にご支援とご協力をいただき心より御礼申し上げます。

5年前、創部60周年の年には東日本大震災が発生し甚大な被害で多くの方々が亡くなりました。福島第一原発事故においては、廃炉作業も一進一退の状況です。

また今年4月中旬には、熊本、大分両県で発生した地震により多くの方々が被災されました。衷心よりお見舞い申し上げます。

さて今年は西南学院創立100周年記念の年です。本年度一杯記念事業が開催されます。

我々西南学院大学バドミントン部は1951年創部、今年65周年を迎えます。

ここに大学の後援をいただき、創部65周年記念式典を開催する事になりました。

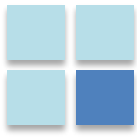
5年前の「心をつないで60年」から「オモイツナグ 65！」のスローガンのもと現役、OB、OGが一丸となってバドミントン部の強化、発展、シャトル会の発展に力を入れ、九州の学生バドミントン界の中に「西南ここにあり」と胸が張れるように共に力を合わせましょう。

日本のバドミントン界に目を向けると、リオデジャネイロオリンピックで女子ダブルス高松・松友組が金メダル、女子シングル奥原選手が銅メダルを見事獲得し、その他参加選手も我々バドミントン愛好家に夢と希望を与えてくれました。現役の皆さんも入部時の夢の実現に向けて練習に励んでください。

また、OBプレイヤーの皆様も健康第一で地域の活動にご尽力いただき、対外試合にもご参加いただき西南の名を高めてください。

今後も、西南シャトル会、現役部員共々に協力し、大学並びにバドミントン部、シャトル会の益々の発展に寄与したいと思います。

最後に今後の皆様方のご健勝とご活躍をお祈り申し上げますとともに「オモイツナグ 70周年」へご協力お願い申し上げます。



創部 65 周年記念に寄せて



西南学院大学 バドミントン部部长
伊藤 龍峰

バドミントン部創部 65 周年、おめでとうございます。

バドミントン部は 1949（昭和 24）年の大学創立後 3 年目に創部された、本学で最も古く、そして伝統あるクラブの一つです。

現在、本学には体育会系クラブが 33 部ありますが、残念なことに、その中には部員の減少や指導者の不在等を理由として廃部あるいは休眠中のクラブがあることも事実です。そのような状況にあって、バドミントン部は、64 名（男子 37 名・女子 27 名、2016 年 5 月 1 日現在）の部員が所属する大所帯のクラブであり、その活動実績も着々と上がっているところです。このことは、現役部員がバドミントンに青春の多くを捧げていることの証であることはもちろんですが、何よりも長い間バドミントンに情熱を持ち続けてこられるとともに、絶えず現役部員を側面から支援していただいている、西南シャトル会の皆さん方の存在が大きいことは言うまでもありません。バドミントン部部长として感謝申し上げますとともに、現役部員一同になり代わりまして熱くお礼を申し上げる次第です。

バドミントン部は、創立当初はほんの数名のバドミントン愛好者によって同好会として立ち上げられ、期間を置かずして正規のクラブに昇格したと聞いています。初めはたとえ濫觴の一滴ほどの流れであったとしても、今では、このような大きな流れとなって脈々とバドミントンそしてバドミントン部に対する思いが受け継がれていることを考えると、どれだけ多くの OB・OG が、現役時代に、決して広いとは言えないバドミントン・コートではありますが、その中で広い心や豊かな心を育てて来られたかが容易に想像できます。私がバドミントン部部长をお引受けしてまだ 10 数年ではありますが、本学バドミントン部のこれからも長く続くであろう伝統や歴史に連なる一時期を橋渡しするお手伝いができることを光栄に思っております。

今後とも、現役部員に対する西南シャトル会のご支援をお願い申し上げますとともに、西南シャトル会の皆さん方の、ますますのご活躍とご健勝をお祈り申し上げて、私の創部 65 周年のお祝いの言葉といたします。



後輩にも伝えたい

主将 18期 靱井 慶亮

私は西南学院大学バドミントン部キャプテンの靱井慶亮です。

この度は西南バド部 65 周年おめでとうございます。

私は一昨年このバドミントン部に入ったのですが、この部活がこんなに歴史ある部活だということを知りませんでした。

私はこのような歴史ある部活のキャプテンを務めさせていただきすごく光栄に思っています。

ここまで部活が続いてきたこと、今当たり前のように練習ができていることに対して、改めて先輩やOBの方々に感謝しなければならないと思います。

後輩にも今この環境でバドミントンができているのは、先輩やOBの方々のおかげであるということ伝えて、今後の大会で良い結果を残して、先輩やOBの方々に良い報告ができるように頑張っていきたいと思います。

残す大会としては三地区と県リーグとなりましたが、三地区ではひとり一人が上を目指して経験を積んでいき、県リーグではその経験を生かして一部の中でも上位に入れるように頑張っていきたいと思います。

歴史に名を刻めるように

女子リーダー 18期 岩切 咲歩

西南シャトル会 65 周年記念を迎え、これまで活動してきたバドミントン部について、今までの活動の振り返り、70 周年に向けてのこれからの活動を考察しました。

これまでバドミントン部は、主将をはじめ部員全員で公式試合はもちろんのこと、校外試合や練習試合に向け、西南学院大学の名を背負い、日々練習に打ち込んできました。

その中で先輩方から受け継いだこともあり、バドミントンという競技だけではなく、礼儀作法や精神面の強化など、これからの自分の人生にプラスに働くことを部活動から学んでいます。

先輩から受け継いだことを後輩にも自ら教え、公式試合での入賞と、リーグでの昇格を目指し、部員全員で目標を達成するために努力を続けて行くことが大切だと考えています。

今後 70 周年に向けて、結果を残すためにひとり一人が謙虚さを持ちつつ、バドミントンに対する高い意識を持ち、切磋琢磨しながらバドミントン部の歴史に名を刻めるよう努力していきます。

ラケットが「ツナグ」



みなさん。学生時代にどんなラケットをつかっていましたか？
少し思い出してみてください。そう、あの時を。

新入部員のころの思い出 58期 平野小五郎



打ちごろのシャトルコックが来た。思いっきりスマッシュ。
決まった。ホッとした瞬間に審判の無情な声。「フレイム！」
今から62年前の昭和29年当時はコックがラケットの枠に
当たるとその時点で失点となった。

その時、私にはフレイムした感触はなく当然抗議した。判定は覆せなかった。
しかしフレイムは審判が瞬間的な音を基準に判定するだけに微妙なところがあった。
西南バドミントン部創始者の55期谷安行先輩や増田靖文先輩などはフレイムを告げられた
とたんに猛烈に抗議し、審判も先輩の威圧感に押されて判定を取り消したような覚えがある。

当時フレイム制が採用されたのはラケットが木製でシャトルコックがフレイムに当たった時の
音が比較的明瞭に判別できたからかもしれない。



当時のラケットの状況については私の記憶装置はすでに消滅していたので59期の岩永千秋さんや61期の野田安紀さんに聞いてみた。お二人の話によると当時の主力はサンバタラケットで薄い木材を5, 6枚貼りあわせたものだったらしい。木材だから夏になると熱気で膨張して枠が反りくりかえる。これを防止するためにプレスなるものにラケットを挟んで保管した覚えがある。



また、ガットについては不器用な私もなんとか張っていた。ただ横に張るガットを強く締め過ぎてラケットが幾分細長くなったことがあった。

さて、当時の西南大学には体育館がなかった。西南中学校のご厚意で体育館を使わせていただいたが天井が低い。私にはすぐにハイクリアーを打つ悪癖があったのでその矯正に役立った。ただし今はその悪癖が復活している。夏休みの合宿では増田先輩のお世話で津屋崎小学校の体育館をお借りして練習した。炊事は二人一組の当番制。カレーライスをつくったはいいが、ごちん飯になったのは申し訳なかった。私は現在週2回練習している。木曜日は61期の下村武さん主催のJBY80。練習場はおもに城南体育館。60期の大江和久さん、61期の野田安紀さんもいっしょだ。大学時代の友人と50数年たってまだバドミントンができるとは。神に感謝している。月に1回の飲み会も楽しみだ。日曜は当人小学校の当人クラブ。こちらは40数年続いている。先日私が練習をさぼった日に今年の新入部員のひとりがきてくれたそう。バドミントンを続けたおかげでいろいろ「絆」ができた。今からもできる。ありがたいことだ。

ラケットの思いで 73期 藤川 幹



1969年4月、初心者としてバドミントン部の門をくぐり早いもので47年経過しました。

この間、細く長くバドミントンに関わりを持って来ました。

創部65周年記念誌へラケットの思いで、愛用のラケットについて思い起こし寄稿しました。

入部時は、先輩方の勧めでヨネヤマラケットをマイラケットとして購入しました。

(フレームは合板、シャフトはスチール、重さは130g)

値段は2,000円前後、先輩より重い方が良いとの指導がありました。

ラケットは手首でなく肩で振るのだと教えられました。(正しかったのかは不明です。)

最初のラケットは1年ぐらいでパートナーと接触しフレームにひび割れが生じ破棄しました。

ただしハンドル部(グリップ)はガット張りの道具として再利用しました。当時はストリングス(ガット)が切れたときは、皆自分で手張りをしていました。

張りは今と比べるとやはり緩く、スピード、飛距離は出ませんでした。

70年代は木製フレームが主流のため、フレームの反りを防ぐためプレスをはめて持ち運びしていました。シングルとダブルプレスがありこれをはめて持つと少しは上級者に見えました。

その後はカワサキのブルーリース(フレームとシャフトがホワイト、重さ125g)

ヨネックスのアルミ製ラケット(110g) サンバタカーボンラケット(115g)

カールトンの扁平シャフトラケット、トヨダセミラージラケット(107g)

ゴーセングラスファイバーラケット(87g)等

その時代のラケットで楽しくプレーすることが出来ました。

最近では80g台の軽量ラケットが主流で、品質も良くなり長持ちしています。

今愛用のラケットは、還暦の年購入したゴーセングラスファイバー(87g 赤色)

6年使用中です。破損しない限り大事に使い続けたいと思います。

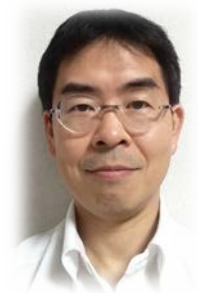
参考までにバドミントン競技規則に、ラケットはフレームの全長680mm以内、幅は230mm以内と規定されています。ただし重さの規定はありません。

皆さん一度自分のラケットを測ってみては如何でしょうか。



ラケットがツナグ キオク

93期 久保田 和広



試合会場の体育館

激しい鼓動と呼吸 流れる汗

じつとりと湿ったグリップ

何かを言い聞かせるように見つめる先のラケット

頭上のシャトル

思いっきりスマッシュを弾く音、手ごたえ

相手コートに吸い込まれるシャトル

一瞬の静けさ 湧き上がる歓声

学生するとき、ラケット何を

使っていたっけ？

ヨネックスのカーボネクス20、

エアロータス100、

プロケネックスの708、

ヤマハのEOS80

う〜ん こんなもんかなあ。



ラケットの名前は覚えてないけど、はっきりと覚えているあの場面

ラケットに向かって、自分を落ち着かせて、自分に言い聞かせて、

あと一本に向かう自分がいました。

みなさんのラケットはどんなキオクをツナイでくれるでしょうか？



ラケットが「ツナグ」寄稿者年表

73期 藤川



1950～60年代

1990～2000年代



58期 平野

1970～80年代



93期 久保田

2010年代～